



模擬国連キャンプの安全保障理事会で、北朝鮮の代表役（左）を囲んで質問する加盟国代表役の学生＝14日午前、大分県九重町

国内外の学生が参加した「模擬国連キャンプ」が14日まで4日間、大分県九重町の大学施設で開かれた。学生たちは「国連加盟国の代表」になり、日本や国際社会が直面する課題を英語で議論し、決議を採択するまでの過程を体験した。最終日は北朝鮮を巡る決議を練った。

模擬国連は国際問題への理解や交渉術、国際感覚を鍛える教育方法として、欧米では授業やサークル活動で実践されている。九州では初めての取り組みで、九州大と立命館アジア太平洋大、英国のオックスフォード大の学生13人でつくる実行委員会が企画した。

呼び掛け人で、実行委員長を務めたオックスフォード大の滝野俊太さん（21）は「日本人学生は海外で自分の意見を主張する意欲が弱い。日本に新しい教育を持ち込みたい」と狙いを説明した。

参加者40人のうち日本人は高校生5人を含む22人。外国人は中国、韓国、ベトナム、インドネシアなどの留学生ら。キャンプの前半は国連の歴史や安全保障理事会、互いの意見を尊重することを学んだ。後半は各国の代表役になり、他国と交渉しながら文書をまとめることに挑戦した。

14日の「安全保障理事会」は、北朝鮮の原子力発電所で事故が起きた場合の対応がテーマになった。学生たちは医薬品や食料の提供、国際機関の専門家の派遣、避難民の受け入れなどについて着地点を探った。

フランスの代表役が川や海の汚染拡大に懸念を表明すると、アルゼンチンの代表役は「日本では原発事故で汚染水をタンクにためた事例がある。その技術を北朝鮮に持ち込んでもらおう」と提案。日本を含め、各国が賛同した。

政府開発援助、核兵器と外交政策、日本の常任理事国入りの是非も論議。常任理事国入りに関しては「日本は米国を支持するだけ」「中国と常に衝突する」と否定的な意見が相次いだ。

九州大4年の末松祥英さん(22)は「英語の力不足を感じたが、積極的に議論できた。何より国際社会の課題への関心が強まった」。国内外の模擬国連に参加した経験がある東京大4年の広中彩乃さん(22)は「これまで参加した模擬国連では対立する国と話さないこともあったが、柔軟に対応することの大切さに気付いた」と成果を口にした。

生徒を引率した福岡雙葉高の英語教諭、大庭真佐子さんは「多くの外国人と議論を重ねることで、国際性や協調性も身に付いたのではないか」と振り返った。

来年も実施する予定で、滝野さんは「楽しく、深く学ぶことを追求したい。九州から新しい教育が全国に広がってほしい」と意欲を語った。